

常に、道路と交通の状況に応じて、安全速度で走ることを習慣づけることが、事故防止上、最も大切である。

※以上、一例を挙げたが、交通事故を起こしてからは遅いのである。交通事故を防ぐには前に述べたように、普段、交通ルールを遵守し、安

全運転に徹すること以外にないと思われる。広島大学生の皆さんは、若年者の模範的立場にあるという強い自覚のもとに、交通マナーの向上に努めるとともに、交通ルールを遵守し、交通事故防止に格別の配慮をされるよう祈念している。

## 自転車、この効率的な乗り物

中国新聞社論説委員

保島 勉

自転車は「便利な乗り物だ」と言う人は多いだろう。だが、どのくらい便利なのかをはっきり言える人はそうたくさんはいまい。

人が一マイル（一・六キロ）移動するのに自動車だと千八百六十キロカロリーのエネルギーが必要だが、自転車にするとわずか三十五キロカロリーですむ。歩行に要する百キロカロリーの三分の一と低く、経済効率は最高だ。こう言ったのは、米環境団体ワールドウォッチ研究所が毎年出している「地球白書」（一九九〇―一九九一年）である。

さらに白書は、大都市での自動車の渋滞や駐車場の確保という問題も自転車だと解決しやすく、排ガスによる大気汚染や、石油輸入

による国民経済の損失も少なくなるなど、効果は大きいという。こうして「自転車―小さな惑星の乗り物」とたたえた。温暖化など地球環境が問題となつている今、自転車に勝る乗り物はなく、もつと見直されてよいというわけだ。

これよりもずっと早く自転車の効用に注目していたのは、現代社会を鋭く見つめる思想家、イヴァン・イリッチだ。「自転車に乗った人間は歩行者の三倍か四倍速く移動することができ、その場合費やすエネルギーは歩行者の五分の一ですむ」と「エネルギーと公正」（一九七四年刊）に書いた。自転車は彼によると、人間の最新陳代謝エネルギーを移

動力の限界ぎりぎりまで効率的に転換できる理想的な変換器、ということになる。

彼の同書からもう少し引用しよう。「自転車はまた場所をこくわずかしら取らない。自動車一台が駐車する場所に自転車を十八台とめることができるし、自動車一台が食う空間を三十台の自転車を通ることができる」「自転車は、乏しい空間やエネルギーや時間をそれほど大量に奪わずに、人間を相当な速度で移動させるのである」など。

二つの車輪を縦に並べ、人がその上に乗って走っても倒れない―というすばらしい原理を応用した自転車が発明されたのは、十九世紀初めの西洋だった。日本には慶応年間に導入され、文明開化の象徴の一つとなった。

その自転車に強敵が現れた。日本では昭和三十年代後半から普及しはじめた自動車である。国も自治体も道路に四輪車を通すことしか考えなくなつた。歩行者や自転車は道路からはじき出された。道路上からは遊びに夢中になる子供や、おしゃべりを楽しむ主婦の姿が消え、道路は人間味を失つていった。

自動車道路は私たちの社会生活をすっかり変えてしまった。隣人間の距離を引き離し、職場や病院、ショッピングセンターなどに出かけるにも、数十分、一時間以上と時間がかかる。高価な自動車を買うために、それだけ余分に働かなければならなくなつた。

「一人あたりのエネルギーがある適正な水準をこえると、いかなる社会もその政治体制